

希望と絶望と

亡き大学院生の思い出

石川 栄一



一 はじめに

人それぞれ生まれも違うし環境も違う、

したがって、価値観も考え方も、みな異なっているのは当然である。

この文章の目的は、生命とは何か、なぜその命を自分で閉じてしまったのか、挫折の原因は何か、また、挫折した場合どうしたら良いか、周囲の人間はどう対処すべきだったか

等について、真剣に考えてもらいたかったのである。

私は、すべての方々に、弱き者に対して、相手が誰であろうとも、同じ人間として、人格と人権を尊重して戴きたいと常に思っている。

二 彼らとの出会い

松岡君（仮名・以下同）が、私が所属している研究室に配属されてきたのは、昭和四十九年の夏であった。講座配属歓迎コンパでの自己紹介の時、教授から「なぜ、この研究室を志望したか」という質問があった。

大部分の学生は「もっと研究を深めたい」とか「真理を探求したい」などと述べた。しかし、松岡君は、志望した目的と大学院に進学する目的について、「高い学歴を身につけ良い会社に就職するため」という考えを持っていた。

コンパは、大変なごやかな雰囲気、夜十時ごろ終わった。

【私の日記より抜粋】 昭和四十九年七月四日（木）

昼休み、日高芽室岳登山の打ち合せがあった。午後からコンパの準備をした。

六時頃から歓迎コンパが始まった。K君が軍艦マーチを歌って、たいへんおもしろかった。皆、腹をかかえて笑った。僕も音頭を取った。

昭和五十年春、松岡君は大学院に進学した。

彼は、他の学生が卒業で、研究室から出て行った後、まだ残っていた同期の学生と二人で、自分達が研究していた部屋の大掃除や窓拭きをしていた。

当時、私達の研究室には、博士課程の0さんがいた。その0さんは非常におとなしい人柄で、彼と暮らした五年間、怒った顔を一度も見ることがないくらい静かな院生であった。活発で現実的な松岡君とは対照的であった。

翌年、0さんは博士課程を修了し、その後に、松岡君と共に新しく、修士課程の横畑君（仮名・以下同）が、私といっしょの研究室で暮らすことになった。

昭和五十一年四月八日（木）

松岡君と、横畑君が僕の部屋に移ってきた。松岡君は窓際の席に、横畑君は、0さんがいた席に落ち着いた。昼休み、松岡君と囲碁をして二十一日勝った。

ところが、横畑君は、歯に癌ができるという、日本には十人程しかいないという最悪な病気にかかってしまった。

しかし、横畑君は見かけ上は、気を落としていないように見えたが、治療を受けていた彼の顔は、日増しに腫れてきているのがわかった。

そして、ついに手術をすることになった。癌が顎の骨まで転移していたらしく、その骨を切り取る大手術であった。

横畑君と気があった松岡君は、暇があれば病院に見舞いに行っていた。

私が見舞いに行った時は、もうすっかり元気になっていた。

横畑君の手術は成功したかのようで、しばらくして退院してきた。彼の顔は人が変わったかの様に、以前とはかなり違っていた。私は治って、ほんとうに良かったと思った。

まるで夢でも見ているように感じた。しかし横畑君は、通院の日々だった。

一方、松岡君は、当時人気絶頂のピンクレディのファンであった。家教先の子供と、いつもそのアクションの真似をしていたらしく、とてもうまかった。

三 国家公務員試験の失敗

松岡君は、修士二年目になってから、国家公務員試験受験のための勉強を始めた。両親も公務員になることを望んでいると述べていた。また彼は、試験に受ければ大学をやめると言っていた。

その口調から、早く大学から出たい、早く就職をしたいという気持ちがうかがえた。この方向転換により、結果として、彼の運命が決定されたと思われる。私は、何故そうまでして中退したいのか疑問だった。

その夏、松岡君と横畑君は、蔵王に旅行に行った。後から聞いた話のだが、同行した松岡

君の母親は、彼らが丘の方に走って行く姿を見て、天国にでも昇って行くように見えたという。（松岡君は子供の頃、生みの母を亡くしている。）

彼は国家試験に失敗した。しかし、私には彼が気を落としているようには受け取れなかった。また一度の失敗で挫折するような人物ではなかった。

四 研究の日々

松岡君はその後、トルクモータの研究をしていた。私はその実験装置を作った。

昭和五十一年十月二十一日（木）

今日、松岡君に頼まれて、微少変位計の増幅器とトルクモータの調整をした。

夕方から、学科の職員歓送迎会があった。

昭和五十一年十一月十一日（木）

昼から、松岡君が実験をしているセンサーの調整をしてやった。

七十五度位まで線形にすることができた。松岡君はたいへん喜んだ。

彼は実験がうまくいかない事で悩んでいた。何度もそのデータを見せてくれた。

その応答波形は、かなり振動していて、どう見ても良い波形ではなかった。

私はおそらく、増幅器のドリフトやノイズにも原因があると考え、もう少しゲインを下げた方が良いと思った。

ある日突然、彼が悲壮な顔をして「教授に実験装置を壊された」と伝えに来た。

私が恐る恐る実験装置を見ると、センサーが増幅器のシャーシから無惨にもぎ取られていた。

私は「壊されたらまた作ればいいさ」と言ってやったが、彼は収まらなかった。

彼には、早く実験を終わらせ、修論を書いてしまいたい、という焦りがあったと思われる。だから、ドリフトの少ない増幅器に変更した方が良いのではと言う私の進言にも耳を

かさなかつた。それは、装置の一部でも変更したら、実験を初めからやりなおさなければならぬからだ。

彼はセンサーを壊された事に対して「今までの実験が水の泡になった。今度失敗したら笑ってやるんだ」と同じ言葉を何度も繰り返した。

私は彼の気持ちが解るような気がしたが、かなり興奮しているので、少し落ち着くまで彼の言い分を聞いて上げた。そして、もっと精度の良い直流アンプを作ることにした。

それから彼は、教授と助手の指導をうけて、壊されたセンサーを作り直したが、二度と実験をする事はなかつた。

五 運命の年

運命の昭和五十二年が明けた。仕事始めの日、私達の研究室で飼っていたペットの熱帯魚が、水槽のヒータが切れて全部死んでいた。

その春、松岡君は留年した。単位が足りなかつたらしい。彼は奨学金が打ち切られ経済的なことで悩んでいた。そんな訳で、彼は私の母が勤めていた会社でアルバイトをしたこともあつた。

私の母は、松岡君のことを「たいへん思いやりのある優しい学生さんだね」と述べていた。彼は常に同じアルバイトをしていた後輩のM君の事を心配していたという。

その年の七月の下旬、北大工学部で電気学会の全国大会があつた。

だまっても汗が出るほど暑い日が三日間続いた。私は受付の手伝いや、レンタカーで荷物の運搬等を手伝つた。何名かのアルバイトの院生はさぼっていて、教授から「賃金カットだぞ」と注意される者もいたが、松岡君は真面目にやっていた。



利尻山（礼文島より）8ミリフィルムより

六 利尻山登山

昭和五十二年八月の上旬、彼と研究室の院生三名を連れて、利尻山の登山に行った。

私は天塩町の近くで油断をし、スピード違反（20キロオーバー）で捕まってしまった。

松岡君は「同乗者にも責任があるのだから罰金は皆で割り勘にしよう」と言った。

私は、スピード違反は運転手の責任なので辞退したが、結局、松岡君達の好意を受け入れた。稚内の郵便局で反則金を納めフェリーで利尻島に向かった。

昼頃、利尻島の鴛泊キャンプ場に着いた。



利尻山登山口 松岡君（中央）8ミリフィルムより

翌日、悪天候だったため、登山は明日に延期することにし、姫沼ハイキングをした。

その時、ひとり離れて海岸線を歩く彼の後ろ姿には、少々寂しさが感じられた。

次の日の早朝、天候が快復してきたので、利尻山登山を決行した。

七合目に着いた時には再び天候が崩れてきたため、私の判断で山頂の ATTACK は諦めた。下山の途中、皮肉にも天候は快復した。鴛泊の岬から眺めた紺碧の海はすばらしかった。

翌日の朝、私達は礼文島に渡った。香深にてレンタル自転車でサイクリングをした。松岡君は子供の様に、はしゃいでいた。

午後からバスで船泊に行き、マーケットで食料とビールを買い久種湖でキャンプをした。松岡君は食べ物には詳しかった。たいへん暑い日で、また疲れていたのものでビールで乾杯をしたら、もう動きたくなかった。

皆元気がなかったが、松岡君だけは弱音をはかなかった。年上の他の院生よりも、はるかに大人だった。次の日、私達は往路と同じルートで帰途に付いた。

私は運転をしながら「打ち上げコンパをしよう」と皆に都合を聞いた。できれば、皆が帰

省する前にしようと思った。そのとき、松岡君は大きな声で「僕は帰省しないよ」と言った。私には、帰りたくない、というように受け取れた。他の二人も帰省しないようだったので、一週間後に私の家でやることにした。

打ち上げコンパの当日、登山に参加した院生を車に乗せて、自宅に案内した。

松岡君は、私の娘に赤いバックを買って持ってきた。

皆と、利尻山や礼文島の思い出、そしてスピード違反などの話題で花を咲かせて飲んだ。話しも尽きて皆が帰るころ、松岡君は、私の母にお世話になったからと言って、挨拶をしていた。彼は、帰りの車の窓から母の姿を振り返りながらいつまでも見ていた。

松岡君が下宿に帰宅してからも、私の母に無事着いたからという電話がきていた。

母が言うには、たいへん、なごりおしそうだったという。

七 彼らの死

松岡君との話題は、いつも就職の話しになった。彼は国試に失敗してからは、某電力会社に就職したいという希望を持っていた。また、毎日のように、誰かに手紙を書いていた。

昭和五十二年八月の下旬のある日、彼はなぜか、いつもと違い、暗く沈んでいた。私は、他の誰かと口論でもしたのだろうと思ったが、用事があったので何も訳を聞かないで帰宅した。その時の彼の顔は一生忘れられない。よもや、それが松岡君との永遠の別れになるとは予想もしなかった。翌日も、翌々日も、その次の日も、彼は研究室に顔を見せなかった。そして、四日後の八月二十七日土曜日、彼が自殺したという知らせが入った。その頃、私が所属している研究室のほとんどの教官は、学会のシンポジウムに出かけていて不在だった。

昭和五十二年八月二十七日（土）

午前中、博士課程のHさんのステレオアンプの修理をした。アンプ前段のトランジスタが壊れていた。昼、妻子と待ち合わせて、工学部で食事をしようと思ったところ、助手のIさんに会い、松岡君が自殺した訃報を知らされた。

まさかと思ったが、北署にいったところ、数名の教授が事情を話しているようであった。

私は、あんなに明るかった彼が自殺したとは信じたくなかった。
当時、一部の教授は、松岡君の事を非難した。学生委員の教授は「**在学中の自殺で良かった。就職してからの自殺なら大学として大変なことになった**」と。
私は松岡君の名誉のために言いたい。彼は多少デリケートな面はあったが、思いやりのある普通の学生だったと。

昭和五十二年八月二十八日（日）

午後、教官から電話があり、松岡君の仮告別式は二時からということなので、平岸に行った。皆、沈痛な思いであった。

昭和五十二年八月二十九日（月）

朝から松岡君の机の周りを整理した。仙台から、彼のご両親がみえた。
ライターやセーター等、彼の所持品を持って行った。
博士課程のHさんと全日空まで見送ろうと思ったが。既に、帰った後だった。

研究室の松岡君の机の上には、綺麗な花が供えてあった。
彼は今、東北地方の墓地にしずかに眠っている。
私の娘は、今でも松岡君から貰った赤いバックを大切にしている。

その年の秋、横畑君の癌が再発し入院した。彼はもう助からないと感じたらしく、大切にしていた電卓を私にくれた。

翌年、横畑君は松岡君の後を追うようにして死んでいった。やせ細った彼は、もう病の苦しみから解放されたかの様に、やすらかな顔をしていた。

八 死の背景と兆候

今思えば、横畑君は癌という病気だったから仕方がないかも知れないが、松岡君の場合

は、死に至るまで、自殺の兆候がなかったと言えは嘘になる。

ある教授は「松岡君とは話が合わなかった」、また「大学院に来るべきでなかった」と述べていた。

国試に受ければ中退すると決意していた彼、その失敗、留年による経済事情、親の援助は受けたくない、就職のあてもない、まして、このような状態で両親の元に戻れない、彼は、前にも後ろにも進めない所まで追い詰められていたように思う。

また彼は私に「生きていて何かいい事ありましたか」と聞いた時もあった。

突拍子もない問いに対し、私は正直に「辛かった事の方が多いよ」と答えたような気がする。私としては、子供の頃から貧困生活のため、そう答えるしかなかった。

私は、彼とよく登山をした。彼は、時々グループと離れて何かを考えながら歩いていた。彼は自殺する一週間程前から、何人かの人に手紙を書いていた。

また、以前、交際していた女性に電話をしていた事もあった。

「もう会えなくなるかも知れないので、一度会ってくれないかい」と。

それを聞いた私や、周りの院生は、何事かと思い彼のほうを見たが、おそらく就職が決まり、退学するつもりだろうと思った。なぜなら、手紙を書いている時も、電話の時も、彼には明るさがあったからだ。

彼は強がりだったから、他の院生の前では笑顔を忘れなかったし、私の母にも就職が内定していると述べていた。

しかし、私が最後に会った日はそうではなかった。彼は暗く沈んでいた。

その日から彼は下宿に戻らず、夜は研究室で寝泊まりしていたらしい。何人かの院生は、その前日に彼に会っている。

松岡君は、死の直前まで就職の事で悩んでいたらしい。

彼が、死に臨んだとき、絶望の淵で見た夢は、いったい何だったのであろうか。ふるさとの両親の事や、亡き生母の面影だろうか。それとも友人達や教官との思い出だろうか。そして彼は、生みの母のもとにいった。やがて、今年も彼の命日がくる。

九 私の心境

私は、なぜ彼の気持ちを理解してあげられなかったのか残念で仕方がない。

いつも彼のそばに居ながら、あの様な結果になったということは、今でも悔やまれる。

特に、彼の様なデリケートな院生であればなおのこと、十分な配慮が必要であったと思う。

人それぞれ悩みをもっている。楽しい事も辛い事も、希望も絶望も、病気も健康も、生も死も、皆、隣あわせ。人間死ぬ気になれば何でもできるのに。

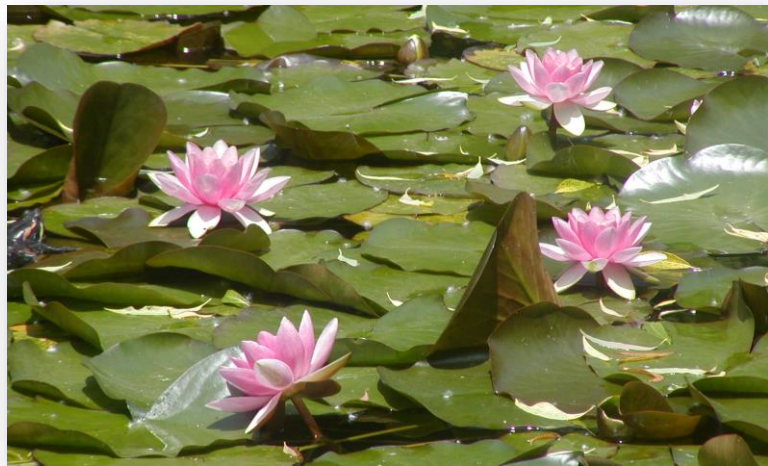
彼の机を整理したとき、引出しの中から一冊の日記帳が出てきた。

それには「家が欲しい、車が欲しい」など、彼の将来の夢と希望が沢山書いてあった。彼がいま生きていれば、持ち前のパワーで、リーダーシップを発揮して、おそらく大企業の重役まで上り詰めていたと思う。

十 あとがき

彼らが他界してから、早くも四〇年近くになろうとしている。しかし、私には昨日の事のように思える。

それが彼らの運命だったとしたら、あまりにも悲しく、はかない人生だったと思う。



北大工学部 大野池のスイレン

私は、自分の進路は他人から与えられるものではなく、自分で切り開かなければならないと思っている。人間社会は厳しい。うまくいかないのが当たり前と思って進めば、挫折したとしても、やりなおしが出来るものだ。

私は、松岡君が大学院を留年した時からの言動を考えると、残念ながら、彼の希望と理想のみが前面に出て、それを達成しようとする努力があまり感じられない。

彼が社会のことや進路のことを、もっと慎重に考える余裕があったら、おそらく、自分自身で幕を引くような結果にはならなかつただろう。

また、彼をそうさせたのは何かという事も、併せて考えなければならない。
しかし、価値観や見解の相違等から、それをつかむのは困難であるかも知れない。



松岡君の墓前にて（石巻市）

誰でも、一度や二度は、死にたいと考えたことがあるに違いない。

その原因のほとんどは、不治の病ではない限り、社会的要因によるものと思われる。

人間関係、家族関係、異性関係、金銭関係等、これらの問題は、少し時間をかけて考えれば、自分の命を絶なくても、解決する道は幾らでもあると思う。このような苦難を踏み越えてこそ人間として成長する。

たとえ自分で命を絶ったとしても、その時点では、悲しみ惜しむ人もいるが、二～三年もたつと忘れられるか、大抵の人は、暗い思い出は忘れ去ろうとする。更に、人々は、自分たちと相手の死とは無関係という事にしてしまう。

彼の場合に限らず例をあげると、軟弱な人間だ、病気だった、自尊心が強すぎた、無責任だ、等々。何の論理も根拠もなしに、相手を非難することにより、自分を守ろうとする。また責任を他に押し付けようとする。これが現実である。死んだ者は、これでは浮かばれない。

私は、彼らの冥福を祈るとともに、この文章を読んだ方々が、あらゆる苦難を乗り越え、強く生きていただきたいと希望し、私自身も彼の優しさを心に抱きながら、生きていこうと思っております。

一九八五年（昭和六十年）七月

石川栄一